バハイと日本の風土

北原　和夫

それぞれの国にはそれぞれの特色があり、それらが個性を発揮し、和合してはじめて最大の調和が実現する。布教にあたってはその国の文化に留意し、異文化のおしつけをするのではなく、その国にあった形でバハイを開花させてゆかなければならない。日本でのバハイの活動も、その点を十分注意しなければならない。そうしないとかえって日本の長所を失わせる結果となり、バハイ自体も日本に根づくことが困難になってしまう。　まずは日本の特性を把握し、次に問題点を理解し、そして対策をたてるというのが賢明かと思われる。

〈日本文化の特性とその変遷〉

日本はもとは信仰心のあつい国であった。日本の伝統宗教は神道であり、仏教や儒教が渡来する以前から日本に存在したものである。神道の神は多いが主神は天之御中主の神（アメノミナカヌシノカミ）だけで、あとはいわゆる天使にあたる。神道は祭礼を重んじ、これによって神に向かい、罪やけがれをはらい、信仰を高めた。特別な戒律はなかったが、誠と和が重んじられ、そのような精神を大和魂と呼んだ。

本来の神道は祭政が一致するもので、性格には宗教とは呼べない。天皇は宗教的権威の中心であるばかりでなく、政治、教育一切の権威を持っていたからである。その権威は神から授けられたものとされ、天皇は公ありて私なしといわれるごとく如何なるときも神意によって国民を統治しなければならなかった。古代の天皇または皇后は、シャーマニズム的な方法で神意をうかがうことができたという。

国民は祭りに参加することによってその信仰心を高め、目に見える天皇を通じて目に見えない神を崇めた。国民は各地に置かれた神社を参拝して指導を受け、自宅に神の名を書いた紙を持ち帰って床の間に安置し、毎日それを通して神を拝んだ。

祭りは国家的レベルでも地域的レベルでも、また家庭でも事あるごとに行われ、生活全般が神と結び付けられ、神を意識するよう仕向けられていた。人々はこうして複雑な神道の教義は知らずとも、自然のうちに目に見えざる神を信じ、敬い、神意にかなった生活ができるようになっていたのである。

神道は歴史学的にはアミニズムの延長のように考えられているが、詳しく調べると非常に優れた、高度な宗教であることがわかる。バハイで強調されている和合の理念は神道でも非常に重視され、指導的約割をはたした大和民族の「ヤマト」とは、やわす（和す）という言葉からきている。「和をもって統べる」、すなわち和合の精神がこの国の根本理念であった。

一国の指導者が私心なく、神意をもって統治し、国民もまた私事よりも公事を重んじて神を敬い生活するという状態は、バハイがまた強くすすめるところでもある。

しかしながら、神道のこうしたシステムも大陸から儒仏信仰が渡来するにしたがい崩れはじめた。国民の信仰が分断され、権力者が台頭し、国内に争いが起きた。当時、日本に渡来した仏教は純粋なシャカの説ではなかった。見るべき点もあったが、国家統治の現実的な政策に欠けていた。

偶像を拝むことのなかった日本人であったが仏像を拝むようになり、細かい法律がなくとも治まっていた国であったが、、多くの法律が必要になりはじめた。今は法治国家があたりまえであるが、日本は本来徳で治める徳治国家だったのである。

かくして、純粋な神道国家はすたれ、歴史書に遺されたような戦乱の世がはじまった。神道は仏教やその他の宗教と混じり合い、迷信と事実が入り混じり、床の間にまつってあった神の名を記した札は、棚上げされるようになった。

百年ほど前、明治天皇が古代の状態を復活させようとしたが、今度は欧米の文化が怒涛のごとく押し寄せ、実現しなかった。それ以後、神道は国策に利用され、再び純粋さを失ってゆく。

戦後、欧米式教育が徹底され、日本の伝統的宗教の陰は薄くなった。皇室は単なる象徴として存在し、実際の政治は民主主義による議会政治が行うことになった。各家庭からは神棚が消え、宗教心そのものがうすれていった。

現在も多くの新興宗教はあるが、社会の趨勢は無神論的である。古代のように宗教よりも、欧米の学問が権威となっているためにその影響を受けざるを得ない。現在の学問の多くは神の存在に対して懐疑的かまたは否定的である。戦後の日本人はその教育を受け、宗教に対して懐疑的である。しかもそれが進歩的であると信じていることが多い。宗教なき民主主義はいきおい愚衆政治に走る。人は今度は自分という偶像を崇拝するようになる。すべてのことを自己の利益になるか不利益になるかだけで判断するようになる。

欧米式の教育が浸透してからは、日本人は自身の特性を正当に評価できなくなってきている。アメリカ人がアメリカを愛するほどに、日本人は日本という国をもはや愛してはいない。かつては国を愛して命をかけた日本人であったが、現在ではむしろ欧米や他国にあこがれ、自国の文化や国民を恥じ、嫌う者さえいる。

バハイの誕生した時代というのは国をあげて戦争をしていた時代であった。それぞれが自国の利益のみを考えて、世界の平和ということをあまり考えなかった時代である。そういう状況で、バハイとして国を愛するよりは世界を愛するというのはもっともなことである。

しかし、今日の日本の状況はいささか違う。国民の大半は国の利益よりも自分の個人的利益を優先させている。そのため当然あってしかるべき健全な愛国心までもがなくなりはじめている。そして、愛国心がないからといって世界を愛する気持ちがあるのかというとそうではない。

日本における現在の問題は、欧米の個人主義が極端に導入された結果、以前の日本人が持っていたパブリックなものに対する思いいれというものがなくなってきたということである。したがって「国を愛するよりも世界を..」という表現は日本人にはピンとこない。国さえも愛していない者にどうして世界を愛することができるだろう。

バハイの理念に対して、多くの日本人は賛同するだろう。しかし、問題はそれをどうやって実現するかである。バハイはそのシステムについて説明するが、信仰のない人にとってはなぜそれに世界を和合するだけの力があるのかわからない。企業の管理主義にうんざりし、宗教団体の群衆心理にうんざりしている日本人は、バハイのシステムそのものに、始めから、魅力よりも抵抗を感じることが多い。理想と現実のギャップが当り前となっている今日、バハイの理想を説明するだけでは日本人は何ら興味を示さない。

（日本の精神への対応）

宗教の和合を説いている団体は多いが、バハイが実際それをどのように行っているかが問題である。バハイの説明をするために他の宗教の欠点をあげつらうようなことをしてはならない。もし望まれるなら率先して他の教会ででも、神社ででも祈りを捧げることができる器量を持たなくてはならない。

「親愛と友情の精神を持って、あらゆる宗教と交われ」バハオラ

「すべての人々が偏見を捨て、相互の教会や寺院にすらも出入りすべきである。」アブドル・バハ。

バハイはむしろ実行の中で宗教全体の威信を回復してゆかねばならない。他の宗教との違いを際立たせ、バハイの優位を示すことは、少なくとも日本ではあまり意味がない。むしろ、共通点に目を向け、バハイの観点から日本文化の優れた点を指摘したほうがよい。それは、与えることにより受け、愛することにより愛され、目を向けることにより目を向けられるためである。日本人はバハイの自慢話にではなく、他を認める謙虚さに感動する。

（日本語の特殊性）

日本での布教という点で考慮しなければならない問題の一つに言語がある。多くのバハイは英語が有用であり、かつバハイの文献も多く、海外からの来客をもてなす必要から英語を利用し、協議すらしばしば英語になっている。バハイの間では英語がかなり訓練されているというものの、一般の日本人は英語に対して苦手意識がある上に、会話に加われないという疎外感を味わうことが多い。日本では、中学生のころから英語教育が始まるが、一部を除いてそれほど堪能ではない。

この日本人の英語下手は有名であるが、その原因が言語体系の違いで習得がむずかしいいというだけでなく、日本語による干渉であるということがようやく理解されはじめている。

欧米人は小川のせせらぎ、波の音、動物の鳴き声などを音楽脳（右脳）優位で聞くが、日本人は言語脳（左脳）優位で認識する。これは、成長期に学んだ言語の影響であることがわかってきている。つまり、言語が単なる伝達の手段ではなく、人間の認識やセンスにも影響を与えているということである。

日本人が既知の外国語を使う場合、通常の脳の生理機構が一時的に崩れ、言語脳に負担をかけることが知られているが、日本人の場合、言語構造の違いからその程度が著しいともいわれている。

神道では、言語を非常に重視しており、言霊学という独特の言語学を伝えてきた。

カミという言葉は、神、上、隠身、火水などという当て字によって意味を表わすことができる。

祭りは真釣り、すなわちバランスをとるという意味が含まれている。

結びは産霊とも書かれ、別々のものを結び合わせるというだけでなく、新たな精神を生み出すという意味がある。

この一連の音声が持つ多様な意味は、使う者をして自然にその宗教的意義を連想させるようになっている。ところが、漢字が導入され音に当てはめられたために意味が分断され、相互の関係がぼやけ、統一的理解ができにくくなり、本来の日本語が持っていた宗教的世界観までもがわからなくなってしまったのである。

古代日本語はもともと一音一音に意味があり、その組み合わせによって事物が表わされており、事物の成り立ちや世界創造のプロセスまでもが言語の構成によって理解できたといわれている。それが外来語の干渉によって本来の特性が失われたとすれば、外来語の導入がいかに大きな問題を含んでいるかうなづけよう。

共通語の使用が、便宜や使用頻度だけから決定されれば、各国の言語や文化に干渉し、その特性を浸食する危険がある。

言語はその国の精神である。共通語の使用でそれが浸食されるとすれば、それは本来の和合の精神に反することになる。

代替案として、一部の神道家からエスペラントの利用が提起された、エスペラントはポーランド人によってヨーロッパの言語を参考にして造られたというものの、ほとんど日本語の音声で利用でき、文法にも柔軟性がある。独特の造語法により、言語の相関性が高く、これが分断された概念をつなぎあわせてゆく効果もある。

ハハイでは共通語の指定は行っていないが、アブドル・バハーは特に東方の布教にこの言語を推奨しており、日本に来た初期のバハイには優秀なエスペランチストがいた。

日本での布教は日本語が原則であるが、共通語ということではエスペラントの研究が望まれる。バハイ内部ではエスペラントがあまり普及していないという理由で敬遠されているが、英語でおしすすめようとすると一時的には良いが結局壁につきあたり、限界のくることが予想される。

言語を伝達の手段としてのみ考え、有用性だけで利用を考えるのは危険である。特に日本においては日本の特性を維持するという観点から、他の言語による布教は慎重にしなければならない。言語と精神の関係についてのなお一層深い研究が必要である。

参考文献

神道教典：仏教伝道会
『右脳と左脳』、角田　忠信（小学館ライブラリー）
『日本人の脳』、角田　忠信（大修館書店）
『続日本人の脳』、角田　忠信（大修館書店）
『バハオラと新時代』、J. E. エッセルモント（バハイ出版局）
『出口王仁三郎全集』（読売出版社）

この論文で述べられている見解は、執筆者個人のものであって、バハイ学術研究会運営委員会の意見を必ずしも反映していない。